

初出誌で読む『雪鴻涙史』：都市ジャーナリズム作家としての徐枕亜

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院：助教授：中国文学

<http://hdl.handle.net/2324/5595>

出版情報：中国小説・戯曲の発展史における遊民の役割に関する研究，pp.95-111，2000-02. 東北大学東北アジア研究センター
バージョン：
権利関係：



中国小説・戯曲の発展史における遊民の役割に関する研究

(国10044002)

平成10年度～平成11年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書

平成12年2月

研究代表者 磯部 彰
(東北大学東北アジア研究センター)

初出誌で読む『雪鴻涙史』 ——都市ジャーナリズム作家としての徐枕亜——

中里見 敬

0. 近代中国における「遊民」と文学

近代以降の中国においては、前近代的・伝統的な要素が継承される一方で、都市化や出版ジャーナリズムの勃興にともない、欧米や日本と共通する近代化現象が進行した。そこで、近代中国における「遊民」と文学の関わりを考えるためには、伝統的ないわゆる「遊民」を対象にしただけでは不十分であり、むしろ科挙廃止後の知識人たちが旧中国社会における特権的な地位を失い、広義の「遊民」と化して、都市ジャーナリズムに作家活動の基盤を求めたことをも考察の対象に含めることが必要になる。そして、そのような現象が、中国近代文学の成立を促す重要な要因であったことは間違いない。

本稿では、故郷の常熟から上海に出て、上海ジャーナリズムの中で華々しい作家活動を展開した徐枕亜を取り上げ、科挙廃止後の近代的「遊民」作家の典型例として考察する。なお、「近代」という用語は、中国では一般にアヘン戦争以後、五四運動までの時期を指すけれども、本稿では特に中国における時代区分にはこだわらずに使用する。

1. 陳平原による中国近代小説史の理解

従来の作家と作品の羅列からなる文学史と異なり、社会状況やメディアとの関連の中で清末民初の文学史をダイナミックに描き出したのが、陳平原『二十世紀中国小説史 第一巻』(1)であった。本章では、陳平原の記述に基づいて、中国近代文学をめぐる状況を概観する。

陳平原の調査によれば、文芸雑誌の創刊は、一八七二年から一八九七年までの二十五年間が五種だったのに対して、一九〇二年から一九一六年までの十五年間には五十七種に急増している。(2)

それでは、このように急増した文芸誌に作品を投稿して原稿料をもらうという行為は、当時の文人にとって、どのような意味を持っていたのだろうか。陳

平原は、当時の流行作家の証言を集めている。

包天笑「把考書院博取膏火的觀念，改為投稿訳書の觀念了」

吳双熱「吾与汝皆一介布衣，文字而外無他長」

李定夷「既無技術性的生産能力，又不能手縛一鷄，只好売文為生」(3)

科挙に及第して官僚になる道が閉ざされたために、文章を投稿して生活の糧を得ざるをえないことが、ここでは作家自身によって語られている。

科挙廃止と文人による小説創作の関係については、鴛鴦蝴蝶派の作家で雑誌編集者でもあった范煙橋が、「民国旧派小説史略」の中で次のように言っている。

旧時文人，即使過去不搞這一行，但科挙廃止了，他們的文学造詣可以在小説上得到發揮，特別是稿費制度的建立，刺激了他們的写作欲望。(4)

続いて、陳平原は次のように述べる。

选择小説翻译、创作作为“职业”，这既谈不上特别高尚，也并非格外低贱。只不过历来清高的中国文人，突然把本该经天纬地的大笔变做谋生的工具，一下子心理适应不了，必须千方百计为自己找理由罢了。热心政治的心小説家如梁啓超、罗普、张肇桐等，确实是以小説为启蒙手段，不考虑其经济效益的；而其他作家则大都以译、作小説为职业。即使不曾成为职业小説家，起码在他创作时，也不能不考虑其作品的经济效益——因为否则很可能卖不出去。(5)

梁啓超など一部の啓蒙家を除けば、大多数の作家は職業作家として売れる作品を書くことを意識せざるをえなくなったという。

大批作家用领取稿酬的办法直接介入小説生产这一商业性活动，却的确始于晚清。作家创作中商品意识的萌现，使得市场的需要成为增加创作的主要动力。不管这种小説创作中的商品化倾向将带来多少负面的影响，但有一点，它引诱更多的作家迅速摆脱鄙视小説的传统偏见，积极投入小説创作热潮，促成了清末民初小説的繁荣。(6)

ここで陳平原は創作の商品化を指摘している。市場の需要が創作の原動力とな

ることにより、清末の作家たちは小説を蔑視する伝統的な観念から解放され、清末民初の小説ブームをもたらしたのだという。

それでは、小説の商品化によって、小説それ自体はそのような変化をこうむったのだろうか。陳平原は書簡体小説の出現を取り上げる。

职业小说家创作时，尽可不把当局的权威或者千古的信条放在眼里，可却不能不考虑读者大众的口味。[……]最明显的例子是徐枕亚的创作《玉梨魂》和《雪鸿泪史》。在中国古代，书信可以论文，可以游记，可以说里，也可以抒情，可就不曾有人以之写小说，甚至也极少为小说中人代拟几篇文辞优美的书信。直到吴趸人作《二十年目睹之怪现状》和王濬卿写《冷眼观》，还是宁愿交代一下当事人得信，然后用说书口吻把信的内容演化为故事情节，而不愿直录书信。只有到了徐枕亚创作《玉梨魂》，才开始录入大量表达主人公主观的信件。徐枕亚正是在编写过《高等学生尺牋》、《普通学生尺牋》，并且目睹各种尺牋风行一时这一现实的刺激下，起而创作《玉梨魂》的。(7)

中国文学史上、書簡の果たした役割を指摘したうえで、徐枕亜の『玉梨魂』に至って初めて、主人公の主観を表現した書簡が小説に取り入れられたと述べている。同時に、その背景には尺牋集が流行した当時の風潮と、自身も尺牋集を編集した徐枕亜の経験と才覚があったことをもあわせて指摘している。

徐枕亜の『玉梨魂』は当時ベストセラーになった作品だが、今から思えば不思議なことに、白話ではなく文言、それも四六駢儷文に近い大変に凝った文体で書かれたものであった。このような文体が多くの読者に受け入れられた理由を、陳平原は次のように述べる。

早期新小说之所以很少引录诗词，主要是因为作家关注社会的正是层面，故意冷落了才子佳人，而吟诗作赋似乎是才子佳人的专利品。辛亥革命后，小说表现的“热点”由官场转为情场，各式才子佳人又重新占领文坛，诗词曲赋自然也随之重新充斥各种言情小说。还不只是于白话叙述的长篇小说中夹入几首艳情诗赋，而是干脆用駢文的笔调来做小说。虽然不是通篇駢四俪六，也夹入一些古文句子以调节文气，可排偶的句型成了长篇小说的主体，还在中国小说史上也算一绝。[……]

由小说中引录大量诗词，到干脆改用駢文作小说，这仍然是个很大的变化，前提是必须彻底告别说书形式，具有一大批对诗词歌赋甚至比对故事情节更感兴趣的特殊读者。后一点或许只有在小说突然升格而诗文相对贬值、一大批读者面临阅读口味转换这一特殊的文化转形期才可能出现。(8)

小説、とりわけ才子佳人小説の中に詩詞をはさむ伝統が清末には衰退していた。ところが、辛亥革命という一応の政治上の達成を見たあとの、民国初期には再び才子佳人式の言情小説が盛んになり、駢儷文で小説を書くことさえ行われたのである。

2. 雑誌連載の形態

作品が雑誌に連載され流通するという事態も、清末から始まる新たな現象である。このことは小説にどのような変化をもたらしたのだろうか。

对清末民初小说集锦式结构形式影响最大的，还是报刊连载长篇小说这一特殊文化背景。清末民初小说家大都直接参与报刊的编辑工作，而主要的长篇小说，又绝大部分是先在报刊上连载然后才结集出版的。这就逼得作家在创作时，不能不考虑报刊连载这一传播方式本身的特点，并对小说的表现技巧作相应的调整。1901年，梁启超就曾断言：“自报章兴，吾国之文体，为之一变。”其实不只散文的文体，小说的结构也因报章兴而为之一变。(9)

陳平原は以上のように述べて、雑誌連載という小説の新たな発表形態によって、小説の構造に変化が迫られたことを指摘している。

雑誌連載の初期には、翻訳長篇小説を連載する際に、章回や段落と関係ない個所でとぎれて、以下次号まわしになることが当たり前であった。組版の都合を優先して、版面いっぱい文字を組んだために、読者にとってはきわめて不便なこのような現象が引き起こされていたという。陳平原の引く次の資料は、そのような状況を指している。

本報所登各書，其屬長篇者，每号或登一回二三回不等。惟必每号全回完結，非如前者《清議報》登《佳人奇遇》之例，將就釘裝，語氣未完，戛然中止也。（「中国唯一之文学報新小説」，『新民叢報』14，1902）(10)

読者の側からすると、小説の先の成り行きを知りたくて、雑誌の次の号の発売が待ち遠しく感じられる。そして、挙げ句の果てには、作者に対して小説のストーリーを教えてくれるよう、手紙を出す者が続出した。次の文は、そうした読者に対する、徐枕亜の返答である。

堯夫詩曰：美酒飲当微醉後，好花看到未開時。窃謂閱小説者，亦当存如是想。常留余地，乃有後縁。日閱一頁，恰到好处。此中玩索，自有趣味。山重水復，柳暗花明，惟因去路之不明，乃覺來境之可快。若得一書，而終日伏案，手不停披，目無傍瞬，不数時已終卷，凶窮而匕首見，大嚼之後，覺其無味，置諸高閣，不復重拈，此煞風景之儉父耳，非能得小説中之三昧者也。（「答函索玉梨魂者」『民権素』第二集，1914）（11）

ここで徐枕亜は、少しずつ繰り返し味読することこそ小説の読み上手であって、あつという間に読み終わり、あとは放置するような読者は「煞風景之儉父」と非難している。おそらく、文彩を理解せず、話の筋だけを追い求める一般読者を批判しているのであろう。

このように、小説が雑誌連載という形態をとって流通することによって、作家の書き方だけでなく、読者の読み方にも変化が生じていることは注目すべき点である。雑誌の次号を心待ちにする読者や、ストーリーや作中人物の運命について作家や雑誌社宛に投書する読者が現れた。近代ジャーナリズムは、近代小説とともに近代読者をも産み出したのである。

3. 『雪鴻涙史』の雑誌掲載

前章までで、清末民初の出版と小説をめぐる状況を概観した。以下、本稿の主題である徐枕亜と『雪鴻涙史』に話題を絞っていこう。

徐枕亜は一八八九年の生まれで常熟の人。虞南師範学校を卒業後、小学校の教師を経て、上海で民権報の編集となった。『玉梨魂』はそのときの作品で、『民権報』に掲載された。のち、『小説叢刊』、『小説季報』の主編を務めた。

ただし、徐枕亜は掲載誌の編集員として『玉梨魂』を執筆し、原稿収入を得ることができなかつたために、改めて同じ物語を日記体にして『雪鴻涙史』を書いたという。（12）

徐枕亜は、『玉梨魂』を『民権素』に掲載したときに、またその後単行出版したときも、原稿料をもらうことができなかった。『玉梨魂』の執筆は、民権報の編集員として正規の仕事の一部とされたためである。そのため徐枕亜は、『雪鴻涙史』を新たに書いて、購入者には『玉梨魂』も贈呈するという販売方法を取り、以前の『玉梨魂』の版權をひきあげた。『雪鴻涙史』と『玉梨魂』をセット販売することによって、民権報や海賊版の『玉梨魂』が流通し、利益

を上げることを差し止めようとしたのである。(13)

このように、書簡体小説『玉梨魂』をもとにして、日記体に改編したのが『雪鴻涙史』である。しかし、注意しなければならないのは、初出の雑誌『小説叢報』における連載と、現在ふつうに見ることのできる単行本による『雪鴻涙史』とでは、微妙な違いがあることだ。一例をあげてみる。

第一章 己酉正月

第六節 中天月色好誰看

第七節 最難風雨故人来

第八節 黯然銷魂

第九節 夢石之訂交

第十節 秦心楚恨

初出誌では、この五節がまとめて『小説叢報』第二期に掲載されている。ところが、単行本では第九節以降が「第二章 二月」に収められている。その結果、

石癡東渡、在正月下旬、非四月上旬也。石癡以玉梨魂事略寄余、誤正月爲四月。

という批語を、単行本では

石癡東渡、在二月上旬、非四月上旬也。石癡以玉梨魂事略寄余、誤二月爲四月。

と改めている。

また、『玉梨魂』では「楊花飛盡鬢無霜」となっていた詩句を、「梅花未落柳初黄」と春にふさわしく改変している。

『雪鴻涙史』は、『小説叢報』第十二期に五月、第五十一節までを掲載しおえたところで、(上巻已完)と記される。一期の休載を経て、続きは第十四期から再開されるが、それまでのように、節に分け、節ごとに評語が差しはさまれることはなくなる。そして、第十四期の末尾には、次のような弁解が述べられている。

鄙人近爲他事糾纏，兼之一身多病，涙史中下兩卷，一時苦難脱稿。恐轉勞

閱者盼望，因仍於本期起續登。遠近惠題詞序跋者，仍請源源賜教，一俟單行本刊時，自當一律加入也。 枕亞附啓。

流行作家となった徐枕亞が、『雪鴻淚史』の執筆をていねいに、原作との異同を注記しながら行えたのは、『小説叢報』第十二期掲載分までと考えてよい。以後は追われるようにして完成までこぎつけたものと想像される。

以下に示すのは、初出の『小説叢報』における、『雪鴻淚史』の掲載状況をまとめたものである。あわせて、第三期と第十四期に付記された、作者自身の弁明も記しておいた。

第一章 己酉正月

- 第一節 不堪回首之元旦
- 第二節 夜臺長寂寂
- 第三節 楚囚對泣
- 第四節 愁苦中之救星
- 第五節 雙鯉迢迢一紙書

以上、『小説叢報』第一期（十三ページ）

- 第六節 中天月色好誰看
- 第七節 最難風雨故人來
- 第八節 黯然銷魂
- 第九節 夢石之訂交
- 第十節 秦心楚恨

以上、第二期（十ページ）

第二章 二月

- 第十一節 上課時之怪象
- 第十二節 鬼話

近來瑣事交困，筆硯爲蕪，本期着墨不多，殊虛閱者之望，當於下期增刊數行，以爲彌補，惟祈鑒諒爲幸。

以上、第三期（四ページ）

- 第十三節 勿謂秦無人
- 第十四節 夜半之算珠聲
- 第十五節 陳門下榻
- 第十六節 一聲河滿子

第三章 閏二月

- 第十七節 年年寒食梨花雨

第十八節	春蘭解作斷腸媒	
		以上、第四期（九ページ）
第十九節	鴻山踏青	
第二十節	歸雲雙翰	
第二十一節	埋香塚下一坏土	
第二十二節	桃牋飛上妝臺	
		以上、第五期（八ページ）
第二十三節	僥倖書來	
第二十四節	及第花開折一枝	
第二十五節	夕陽人影	
第四章	三月	
第二十六節	醉歌當哭	
第二十七節	第二次之贈蘭	
		以上、第六期（十一ページ）
第二十八節	第二次之詠蘭	
第二十九節	女兒身世太淒涼	
第三十節	兩番驚夢	
		以上、第七期（八ページ）
第三十一節	病後之追思	
第五章	四月	
第三十二節	衾中之小影	
第三十三節	何不相逢未嫁時	
第三十四節	向余東指	
		以上、第八期（八ページ）
第三十五節	勸君苦海早回頭	
第三十六節	最後之誓書	
第三十七節	可憐辛苦做春蠶	
第三十八節	爲郎憔悴	
		以上、第九期（十二ページ）
第三十九節	魂羈病榻	
第四十節	黃口嗚嗚腸斷聲	
第四十一節	愁殺白頭翁	
第六章	五月	
第四十二節	似曾相識燕歸來	
第四十三節	玉人病起	

第四十四節 此是兒家續命湯

以上、第十期（十ページ）

第四十五節 化身願作青陵蝶

第四十六節 痛哉一諾

第四十七節 今夜平分一半愁

第四十八節 欲拋終未得

以上、第十一期（十一ページ）

第四十九節 有情爭似無情好

第五十節 而今攔起成親事

第五十一節 魂銷南浦（上卷已完）

以上、第十二期（七ページ）

第七章 六月

鄙人近爲他事糾纏，兼之一身多病，淚史中下兩卷，一時苦難脫稿。恐轉勞閱者盼望，因仍於本期起續登。遠近惠題詞序跋者，仍請源源賜教，一俟單行本付刊時，自當一律加入也。 枕亞附啓。

以上、第十四期（八ページ）

第七章 六月

以上、第十五期（十一ページ）

第八章 七月

以上、第十六期（十八ページ）

第九章 八月

第十章 九月

以上、第十七期（三十四ページ）

第十一章 十月

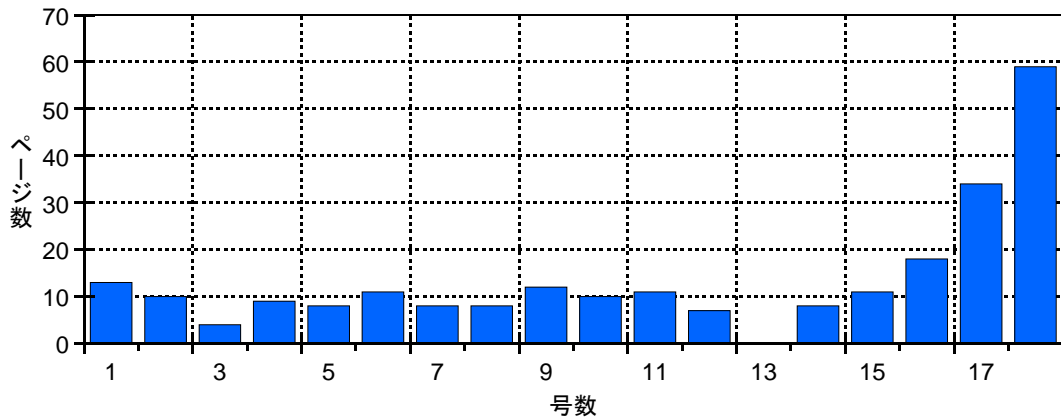
第十二章 十一月

第十三章 十二月

第十四章 庚戌正月至六月

以上、第十八期（五十九ページ）

「雪鴻涙史」の初出誌各号ごとの分量



初出誌各号ごとの掲載分量を示した上の図表からわかることは、第三号の分量が前後の号と比べて半減していること、そして第十三期を休載した後、最終回の第十八回まで分量が激増していることである。この二点については、作者自身が掲載誌上において理由を弁明しているとおりでである。

このように第十三期の休載をはさんで、『雪鴻涙史』の執筆と雑誌掲載の状況は精粗をまったく異にしているのである。

第十三期以降の部分をおのうに草卒のうちに書き上げねばならなくなった最大の理由は、雑誌『小説叢報』の資金を工面する必要があったためのおうだ。鄭逸梅は、次のように記している。

(《雪鴻涙史》)[……]在《小説叢報》上賡續登載，沒有等到刊完，即抽出刊單行本。原來該報社適逢年關，須付許多賬款，單行本一出，讀者爭購，立刻收到一筆款項，一切都靠此應付過去了。(14)

これによると、単行本の『雪鴻涙史』は、雑誌連載の完結を待たずして刊行されたのである。こうして単行本の売り上げによって、雑誌社は年末の支払いを無事に済ませることができたのである。

4. 『小説叢報』における徐枕亜の執筆活動

『小説叢報』の主編として健筆をふるっていた徐枕亜は、あまりに多産なために、同時に他の作品の執筆にも追われていた。

以下に、『小説叢報』の目次から、徐枕亜が執筆したと推定される部分を抜粋して示す。

第一期 1914年5月1日

題詞

発刊詞

短篇小説 神怪小説石人流血

長篇小説 別体小説雪鴻淚史

補白 醒睡録

第二期 1914年6月10日

短篇小説 紅羊佚聞之一僧俠

長篇小説 別体小説雪鴻淚史

新劇 越劇守錢奴 (唯一、枕亜)

第三期 1914年7月20日

短篇小説 紅羊佚聞之二草付道人

長篇小説 別体小説雪鴻淚史

新劇 越劇守錢奴 (唯一、枕亜)

補白 醒睡録

補白 枕亜謎話二則

第四期 1914年9月

短篇小説 滑稽小説黄山遇仙記 (老枕?)

長篇小説 別体小説雪鴻淚史

補白 醒睡録

第五期 1914年10月20日

短篇小説 宋末慘史髑髏山

長篇小説 別体小説雪鴻淚史

文苑 枕霞閣詩選

第六期 1914年11月

短篇小説 紀事小説駢指案

長篇小説 別体小説雪鴻淚史

文苑 枕霞閣詩詞選
筆記 枕匣酒話
補白 枕匣醒睡錄

第七期 1915年1月1日

短篇小說 哀情小說碎画
長篇小說 別體小說雪鴻淚史
文苑 枕霞閣詩詞選
筆記 枕匣酒話

第八期 1915年2月8日

短篇小說 哀情小說芙蓉扇
長篇小說 別體小說雪鴻淚史
文苑 枕霞閣詩詞選

第九期 1915年3月25日

短篇小說 實事小說泣顏回
長篇小說 別體小說雪鴻淚史
文苑 枕霞閣詩詞選
艷藪 花底吟
筆記 鮑家詩話

第十期 1915年4月30日

短篇小說 伝記小說神女
長篇小說 別體小說雪鴻淚史

第十一期 1915年5月30日

短篇小說 革命慘史白楊衰草鬼煩冤
長篇小說 別體小說雪鴻淚史
文苑 枕霞閣詩選
筆記 懣騰室叢拾

第十二期 1915年7月15日

短篇小說 滑稽歷史小說三国志補
長篇小說 別體小說雪鴻淚史

筆記 槽騰室叢拾

第十三期 1915年8月12日

長篇小説 慘情小説棒打鴛鴦録
長篇小説 奇情小説刻骨相思記
文苑 枕霞閣詩選

第十四期 1915年9月20日

長篇小説 別體小説雪鴻淚史
長篇小説 慘情小説棒打鴛鴦録
余興 枕匣詩鍾揭曉

第十五期 1915年10月25日

長篇小説 別體小説雪鴻淚史
長篇小説 奇情小説刻骨相思記
文苑 枕霞閣詩詞選
余興 枕匣詩鍾揭曉
余興 徵求美人吟

第十六期 1915年11月16日

長篇小説 別體小説雪鴻淚史
長篇小説 慘情小説棒打鴛鴦録
文苑 枕霞閣詩選

第十七期 1915年12月15日

長篇小説 別體小説雪鴻淚史
文苑 枕霞閣詩選

第十八期 1916年1月

長篇小説 別體小説雪鴻淚史 (完)
長篇小説 慘情小説棒打鴛鴦録
文苑 枕霞閣詩選
艷藪 第二次美人吟揭曉
文苑 枕霞閣詩選

第十二期までは、「雪鴻涙史」とともに各号において読み切りの短篇小説を掲載している。その後、第十三期以降は、長篇小説の「刻骨相思記」と「棒打鴛鴦録」をおおむね隔号で掲載していることがわかる。「雪鴻涙史」完載後の第十九期からは、「棒打鴛鴦録」が毎号掲載され、第二十二期（一九一六年七月）に完結していることがわかる。

このように、徐枕亜は「雪鴻涙史」の執筆と並行して、多くの短篇小説と、後半は新たな長篇小説の創作に取り組んでいたことが指摘できる。『小説叢報』の主編としての多忙な執筆活動を、当該誌の目次からだけでもうかがい知ることができるのである。

5. 徐枕亜の後半生

最後に、鄭逸梅らの記述に基づいて、ベストセラー作家になった後の徐枕亜の足跡をたどってみる。

『雪鴻涙史』以後、『小説叢報』に「棒打鴛鴦録」、「刻骨相思記」、「秋之魂」を連載した。『小説叢報』の主編を辞した後は、『旭報』、『小説日報』、『小説季報』の編集に加わり、「余之妻」、「讓媚記」、「蝶花夢」を掲載した。ほかに、雑誌『快活』に「燕雁離魂記」を載せ、『蘭閨恨』、『情海指南』、『花月尺牘』などを単行出版している。

しかし、『小説叢報』を去って以後の作品は、「余之妻」以外はほとんど許塵父と陳韜園が代筆していたという。そのようになった原因として、鄭逸梅は「他沾染嗜好，精力不濟，懶於動筆了」(15)といい、またアルコール依存症のような状態であったことを指摘している。こうした事情を記す鄭逸梅の書きぶりには、同情の念が感じられない。

それに対して、徐枕亜の家庭生活については、深い同情を寄せている。徐枕亜の母は、嫁に対して大変に横暴な姑だったようで、兄嫁は姑にいびり殺されたという。徐枕亜の妻・蔡蕊珠も、姑によって離婚を余儀なくされた。徐枕亜は母に内緒で、妻を常熟から上海に呼び寄せて同棲するが、お産後に死亡する。徐枕亜は「泣珠生」と号して、愛妻を失った悲しみを「悼亡詞」一百首につづり発表する。

一方、『玉梨魂』を読んで、徐枕亜の熱烈なファンとなった女性の中に、最後の科挙に状元で及第した劉春霖の娘・沅穎がいた。劉沅穎が北京から送ってきた手紙と詩に対して、徐枕亜は唱和の作を送り返す。こうして半年後には徐

枕亜は劉家に結婚を申し出る。この結婚に反対していた劉春霖に対して、二人は樊樊山を媒酌人にたてて、父の許可を取り付ける。こうして北京で盛大に行われた徐枕亜と状元の娘との婚礼は、『晶報』(16)誌上に「状元小姐下嫁記」という記事となって報じられるのである。ところが、劉沅穎は上海での結婚生活になじめず、まもなく病没してしまう。



一九二四年秋，徐枕亞與劉沅穎在北京舉行婚禮，與來賓合攝於西單報子街同和堂。居新夫婦中者是樊增祥，新娘身旁是劉春霖夫婦及劉公子。左數第二人是李定夷，右數第五人是徐天嘯。

上は、徐枕亜と劉沅穎の婚礼の写真。

魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』（台北：台灣商務印書館，1992）p57より。

これ以後の徐枕亜はますます酒におぼれ、みずから出資創設した清華書局の経営が不振になると、版權もろとも大衆書局に身売りし、自身は常熟に帰郷した。そして、一九三七年に四十八歳で没している。

このような彼の伝記を見てきて興味深いのは、——苛酷な姑と嫁との間で板挟みに苦しむ姿といい、亡き妻に「悼亡詞」をささげることといい、さらには手紙と詩の唱和という小説もどきの文才によって状元の娘と結婚し、それがスキャンダラスに報道されること、最後はその二度目の妻にも先立たれて零落のうちに酒におぼれて死ぬ、——徐枕亜の生涯がいかにも哀情小説作家の一生にふさわしい物語性を帯びて語られていることだ。上海や蘇州の文壇事情に精通し、また実際に徐枕亜と交遊のあった鄭逸梅や范煙橋といった文人の筆になる徐枕亜の伝記が、このような相貌を呈することは、当時の哀情小説の読まれ方とその作家に対する見方、すなわち作品と作家を引き寄せて読むという近代的な表象制度が、上海の商業主義的ジャーナリズムを背景に確立していたことを物語っている。

徐枕亜と状元の娘の軼事は、のちに張恨水の『春明外史』第四十九回に取り入れられた(17)。また、『玉梨魂』の物語は、新劇で演じられ、また一九二四年には明星影片公司以て映画化されてもいる(18)。このようにメディアを超えたひろがりを見せたことも、この作品の特質を端的に示している。

徐枕亜と彼の代表作である『玉梨魂』と『雪鴻淚史』は、まさに上海の都市ジャーナリズムの落とし子であり、それゆえに中国近代小説の典型として、格好の位置を占めているのである。

注

- (1) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』(北京：北京大学出版社，1989)
- (2) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』p67-68。
- (3) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』p80-81。
- (4) 魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』(香港：生活・読書・新知三聯書店，1980)p167による。なお「民国旧派小説史略」は、范煙橋『中国小説史』(蘇州秋葉社，1927)の第五章「小説全盛時期」を改稿したもの。その成立の経緯については、魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』(台北：台湾商務印書館，1992)p32-34, 140-145に詳しい。
- (5) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』p81。
- (6) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』p83。
- (7) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』p87。

- (8) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』 p93-94。
- (9) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』 p137。
- (10) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』 p141。
- (11) 陳平原『二十世紀中国小説史 第一卷』 p140。
- (12) 『鄭逸梅選集』第二卷(哈爾濱：黒竜江人民出版社, 1991) p851-852。
- (13) 『鄭逸梅選集』第一卷(哈爾濱：黒竜江人民出版社, 1991) p858。また、『小説叢報』十六期の広告「敬贈《玉梨魂》」、それに『雪鴻泪史』識語も参照。
- (14) 『鄭逸梅選集』第二卷 p851-852。
- (15) 『鄭逸梅選集』第二卷 p852。
- (16) 『晶報』については、鄭逸梅「民国旧派文藝期刊叢話」に詳しい。いま、魏紹昌『鴛鴦蝴蝶派研究資料』(香港：生活・読書・新知三聯書店, 1980)に収録。
- (17) 魏紹昌『我看鴛鴦蝴蝶派』(台北：台湾商務印書館, 1992) p58、金克木「玉梨魂不散，金鎖記重来——談歴史的荒誕」(『読書』総第 124, 125 期, 北京：生活・読書・新知三聯書店, 1989-7, 8)参照。
- (18) 鄭逸梅「鴛鴦蝴蝶派典型作品《玉梨魂》」, 『書報話旧』所収。いま、『鄭逸梅選集』第一卷による。